

滝澤：それでは、皆様おそろいになりましたので、これより平成 25 年度の佐賀大学教育功績等表彰者との座談会を開催させていただきます。私はこの座談会を主催しております、高等教育開発室の室長をしております滝澤です。本日は司会をさせていただきますので、よろしくお願いいたします。

教育功績等表彰を受けられた先生方、おめでとうございます。この座談会は、教育功績等の表彰を受けられた先生方を囲んで、その主な実施の内容や、それから教育改善、事業の改善などで、どのような点を苦勞されたとか、工夫されたとか、それから、実際に教育改善の効果としてどんなことがあったかというようなこととお話しいただいて、それを高等教育開発室のホームページで学内向けに公開させていただくことで、学内の教育改善に少しでも役立てばという趣旨で毎年執り行っているものでございます。

それでは、始めるにあたりまして、まず、担当理事の瀬口理事のほうからごあいさつをお願いいたします。

瀬口：皆さん、こんにちは。教育担当理事そして大学教育委員会の委員長を仰せつかっております瀬口といいます、よろしくお願いいたします。

この度の「教育功績賞」の受賞、本当におめでとうございます。大学教育委員会を代表いたしまして、受賞されました皆様方へ一言お祝いと感謝を申し上げます。

まずは、本学の教育の充実発展に顕著な功績を挙げられました、文化教育学部の子どもの発達と支援プログラム委員会、代表は園田貴章先生、そして工学系研究科の理工学部 JABEE グループ、代表は後藤聡先生、おめでとうございます。また、授業の実践面で優れた成果を挙げられました医学部の野出孝一先生、工学系研究科の高度技術研修ものづくり技術者育成講座機械基礎コースグループ、代表は木上洋一先生、農学部の永尾晃治先生、そして総合分析実験センターの児玉宏樹先生、おめでとうございます。受賞された先生方やグループの皆様に対して、改めて心から敬意を表すると同時に感謝を申し上げます。

ご承知のように、本学は平成 18 年に佐賀大学憲章を策定して、その中で教育先導大学を目指すことを宣言いたしております。したがって、教育改善、あるいは教育の改革は、本学にとってはもっとも重要かつ喫緊の課題の 1 つでございます。

しかし、この教育の取り組みは、他の取り組みに比べますと、なかなか成果を短期間に目に見えるような形で出すということが比較的難しい側面がございます。こういった状況の中で、先生方、あるいは各学部のグループの皆様方が、今回このような顕著な教育成果を挙げていただいたということは、本当にわれわれ教育に携わる者にとっては感謝に堪えない気持ちでいっぱいでございます。

特に、昨年の 6 月に公表されました文科省の大学改革実行プランでは、大学教育の質的転換によって生涯学び続け、主体的に考える力の育成とか、あるいはグローバル社会で活躍する人材育成などが、強く求められております。

したがって、本学においても、それに踏まえた教育改革の取り組みを進めているところでございますが、その成否は、やはり教育に直接携わっていただいている先生方、そ

れから組織での教育に対するあり方、あるいは取り組みなどに非常に大きく依存していると言っても過言ではないと考えております。

今回、先生方によって挙げていただきました非常に優れた教育上での功績あるいは成果といったものは、今後、本学の教育活動の核となって、さらにはそれが全学的な教育の活性化、あるいは近い将来、国内外で活躍するような人材の育成につながっていくものと確信をいたしているところでございます。

どうか今後とも、先生方には本当にお手数をおかけいたしますが、今までどおり本学の教育の推進役としてご協力とご支援を賜りたいと思っております。甚だ簡単ですが、座談会の開催にあたり一言ごあいさつをさせていただきました。

本日は本当におめでとうでございます。

滝澤：瀬口先生、どうもありがとうございました。

それでは、これから座談会のほうへ入っていきたくと思いますけれども、大体お一人または一グループ、10分程度を予定しております。今お手元に資料がございますけれども、その資料の順番で、まず表彰を受けられた先生方から、先生方の行われた取り組みの概要と、特に特徴を紹介していただきまして、それから、どんな点が特に工夫をされている点なのかということや、その結果として、どんな効果が上がっているのかというような点を6～7分程度でお話しただいて、その後質疑応答という形で進めていきたいと思っております。よろしく願いいたします。

それでは、最初に1号表彰のほうですけれども、今年度からグループ表彰というものが取り入れられまして、その初めての例ともなりますけれども、文化教育学部の子どもの発達と支援プログラム実施委員会の代表の、園田先生のほうから少し取り組みの概要等をお話しただければと思います。よろしく願いします。

園田：よろしく願いいたします。

平成16年今からちょうど10年ぐらい前ですが、発達障害のある子どもたちの親の会に参加をした時、ある親御さんから、「小学校までは親の会の活動に子どもたちが来ますが、中学校になったら来なくなります。しかし、中学校から先にいろいろな問題があるので、佐賀大学で何かそういった中学生を対象とする学習会等の支援活動をやっていただけないでしょうか」と言われたのがそもそもの始まりでした。学生ボランティアを募って、平成16年の5月ぐらいから佐大学習会を始めました。そんな中、学習会に子どもさんを連れて来られた親御さん方から色々なお話を聞く機会を得ました。20歳後半の子どもさんをもつある親御さんは次のように言われました。——「私の子どもがまだ小さかった時、LD(学習障害)という言葉が広まり始めました。『うちの子にはLDの診断があります。』、と学校に言ったら、『レーザーディスクですか??』ということばが返ってきました。」発達障害について認知されない時期が続きました。

そして、「通常学級にこのような障害のある子どもたちがたくさん学んでいます。担任の先生の支援力や対応力をもっとあげていただきたい」、という声に押されて始めたのが、

平成 19 年度専門職大学院等 GP に採択された臨床教育実習でした。この実習は、発達障害や不登校の支援に強い教員の養成を目的としています。2 年間文科省より補助を受けて事業を進めました。そうすると今度は広がりの問題が出てきました。つまり、発達障害や不登校の子どもたちには、教員だけでは対応できません。医療分野、福祉分野を目指す学生にも、共通教育をする必要があると思うようになりました。平成 22 年度から 24 年度にかけて、文部科学省特別経費プロジェクト支援事業として、「発達障害・不登校及び子育て支援に関する医学・教育学クロスカリキュラムの開発」という取組を進めました。

当初、どれぐらいの学生が履修するか心配でしたが、医学部からも多くの学生が関係科目を受講しました。教師や医師等の専門職業人には、「専門的な知識」と同時に「専門職としての知識」も必要です。つまり教員であれば福祉や医療のことも少しは知らなければいけないでしょうし、医師であれば福祉や教育分野のことも知らなければならぬでしょう。なぜなら、親御さんにとってみれば、自分が相談したその先生、その医師が頼りの綱なのです。そこから何か手掛かりが得られないかと期待しているのです。

そこで、全学部学生対象の「子どもの発達と支援プログラム」を先生方の協力を得て、開設しました。コア科目として 4 科目を設けました。このプログラムのための教科書も出しました。それらの科目は今年度よりインターフェース科目「子どもの発達支援」となりました。

医療、教育、福祉の各分野で働きながら地域連携も担うことができる人材を、総合大学の利点を生かして養成することができればと思っています。

皆本：この子どもの発達支援プログラムを学んだ学生たちが、どんなふうに地域の中で能力を発揮しているか。それから、能力を発揮していく面、要するに療育、診断、教育、そういった連携というのをどう地域の中で実現していったらいいのでしょうか。そこはまさに教育の質が問われているところなのだと思うのですが、そこをどう評価したらいいのでしょうか。

園田：このプログラムで学んだ学生の卒後の様子などを調査できればと思っています。

滝澤：どうもありがとうございました。

それでは、何かご質問等がございましたら、先生方、よろしくお願いいたします。

質問に入る前に、同席の先生方をまだご紹介しておりませんでしたので、自己紹介をお願いします。

諸泉：全学教育機構の諸泉と申します。よろしくお願いいたします。

中村：経済学部の中村です、よろしくお願いいたします。

五十嵐：全学教育機構の五十嵐でございます。よろしくお願いいたします。

村山：同じく全学教育機構の村山です、よろしくお願いいたします。

皆本：工学系研究科の皆本です、よろしくお願いいたします。

宮脇：文化教育学部の宮脇です、よろしくお願いいたします。

滝澤：委員の先生方も、高等教育開発室のほうに関わっていただいております先生方です。

何か先生方のほうからご質問等がございましたら、よろしくお願いします。

これは、もう 21 年からやられているということは卒業生を出されていると思いますが。

園田：22 年。

滝澤：2 年からで、今 4 年生なのですか。

園田：今、卒業したのは何名かいますので。

滝澤：その卒業生からはどのような。

園田：少しは連絡がありましたけれども（笑）。今まではとにかく、教員になってもほかの勉強がありますので、なかなか。今すぐ何をやっていると言われても、多分違うとは思いますが。

滝澤：特にそれだけをするわけではないということですか。

園田：ないですから、教員なんかはそれだけでも。

諸泉：少しよろしいですか。

滝澤：どうぞ。

諸泉：先ほどもありましたように、発達障害という状況が、外部からはよく分からないということでした。恐らく以前は、われわれの時代がそうなのですから、そういった言葉すらなかったという状況がありました。現代でも発達障害の状況は、学生には、あるいは、もうすでに教員になった方にも、教員になってから見えてくるのだと思うのですが、最初に、発達障害とはこういった状況なのだという、よく分からないものを学生に伝えていく場合に、どういう工夫をなされるのですか。実は、私も発達障害のイメージはよく湧かないのですが、その辺はいかがですか。

園田：学生に対してですか？

諸泉：学生に、どうやってイメージを湧かせていくのですか。

園田：大学に来ている学生の場合、できるだけ自分の平穏な状態を保てるようなスキルというものを持っています。例えば、コンパには行かないとか、人とはできるだけ触れ合わないようにするなど、「何々はしない」という方法でとっているのです。そこで、「何か困っていることはない？」と仮に尋ねても、「ない」という答えが返ってきます。しかし、第三者から見ると、このままでは就職活動等で相当苦勞するだろうと思われる。そのため、それはそれで対応が難しいですが、何か本人に困ったことがあると支援につなげやすいということがあります。

諸泉：少しハードルを与えてやるといいますか、本人にハードルみたいなこと体験させるという。

園田：そうですね。

諸泉：与えてやりますということ。

園田：例えば、教育実習です。教育実習は教員となるためのインターンシップですが、実習に行くと、自分に気づくという学生も少なからずいます。アルバイトに行くと困ったという経験をしている学生もいると思います。

諸泉：分かりました。

滝澤：そのほか、何かございますか。

中村：今のは多分、現在の大学生の問題ということもあるのでしょうけど、私たちもやはり経験で、例えば、こういう科目を受けに行ったときに、名前としては分かりますけれども、具体的な、例えば、どういう人がこういう発達障害でという知っていることが理解につながります。今の学生というのは、そういうことをもう経験しているのですか。

とくに個別の科目がそうなのですけれども、何か例えば、経済学部であったら、実際科目名があっても、その科目が対象にしていることに何も経験がないから聞いても想像がつかないとかいった面で難しいというのはあると思います。発達障害のこういう支援プログラムの科目を学生に授業するときに、発達障害に対しても、今の学生は割にイメージを持っているのですか。

例えば、自分が小学生とか中学生のときに、こういう友達とかがクラスにいて、だからああいうことで、こういうことを勉強するのだとかいうことは、今の学生は割と分かっているのですか。

園田：大学の4月に入学したばかりの1年生対象の授業で、「発達障害という言葉を知ったことはありますか？」と尋ねると、半分以上が手を挙げました。この言葉自体はよく知られるようになりました。また、小学校生の時、気になる行動をする子どもがいた、と言う学生は多いです。

五十嵐：少し関連するのですけれども、このプログラムは来年度からインターフェース領域のほうで実施されると伺っていますけれども。

園田：そうです。

五十嵐：医学部は今年度からですか。

園田：医学部生は1年生から履修できます。

五十嵐：来年度からは、それは全学部には要はインターフェース領域ですから解放されるわけですね。

園田：はいそうです。

五十嵐：先ほどのご質問にも少し関連するのですけれども、今までは医学部だとか、教員養成課程の学生たちが中心的な受講生であったかと思うのですが、全学的なインターフェース領域でやる場合には、いろいろな学部の学生が受講する可能性もありますし、あるいは受講してほしいと私は思うのですが、そのときに、身近に友人関係で発達障害的な素行、行動をする学生がいると思うのです。

ですから、そういった学生たちとうまいこと付き合ってもらえるような、そういう学生をやはり教養教育として実施するというところに大変大きな意義があると思いますので、今までの医学部や教員養成課程の学生を対象としたプログラムではない、まさに教養教育として、このプログラムをどんなふうに生かしていくのかというところで、ご意見、お考えがありましたらお伺いしたいと思うのですが。

園田：そうですね。青年期の問題は、特に去年から話しています。自立に向けた課題や問題などです。インターフェース科目として必要な知識を身に付かせるだけではなくて、大学生同士、身近にいる仲間を理解したり、自分自身を理解できるような内容も授業に入れたと思っています。

五十嵐：ありがとうございます。

滝澤：それでは、園田先生、どうもありがとうございました。それでは、時間の都合ありまして、次に移らせていただきます。工学系研究科のほうの、理工学部 JABEE グループということで、代表の後藤先生、お願いいたします。

後藤：理工学部 JABEE グループ代表の後藤です。JABEE というのは聞いている方もおられるかと思いますが、技術者教育認定機構とあって、高等教育機関である大学や高専等で技術者を育成する工学系のプログラムに対して、そのプログラムが社会の要求基準を満たしているかを認定する機構がありまして、理工学部での JABEE への対応について検討を行っておりますグループです。

JABEE では基準が設定されておりまして、その基準を満足するような形で教育を行います。その基準ですけれども、目標の設定、学習教育の量、教育手段、また、その目標の達成に関しても根拠資料に基づいて示す必要があります。さらに、PDCA サイクルをつくって教育改善を継続的に行うというような基準があります。

その基準を満足するかが審査されるわけなのですが、その受審の単位としましては、基本的には学科単位、学科の中で JABEE 用に特別にプログラムをつくっておられるところもありますけれども、基本的には学科単位で大学側が JABEE の基準に満足していることを示すということになっています。

理工学部におきましては、JABEE を受審する学科は、もちろん受審に向けて活動しないといけないのですが、そうではない学科を含めて、理工学部全体で JABEE 委員会を組織しまして、学部全体で技術者教育に取り組んでその内容等も考えていきたいと思います。

JABEE は、全国の大学、高専等が受審しているわけなのですが、今回、教育功績者として評価を頂いた点は、JABEE を受審するしないにかかわらず理工学部全体で JABEE の基準等を考えて教育を組織的に行っているということと、理工学部 JABEE 委員会で活動を行われている先生方が、高等教育開発センターや、その他の全学的な運営に携わられて、佐賀大学全体の教育改善、PDCA サイクルの構築に貢献されているということで、表彰されたのではないかと思います。

昨年度、電気電子工学科が JABEE を受審したのですが、JABEE の受審はどのようなことをするかといいますと、まず、自己点検書を作成しまして、JABEE の基準に適合した教育を行っていることを示します。その上で、JABEE から審査員が 2 泊 3 日で大学に来られまして、教育の内容などを、授業参観や教員・学生との面談、施設等の視察や根拠資料等で確認して、基準に適合しているかどうかを判断されます。

今回、受審をしまして、教育には大きく分けますと、学科の対応、学部の対応、全学的な対応がありますけれども、審査側からは、全学的な対応が求められてきています。特に指摘を受けましたのは、学部学科単位で PDCA サイクルが回っていることは分かるのですが、じゃあ、大学全体ではどのように回しておられますかということ、今要求されてきています。今後も理工学部では JABEE を続けていくことになるかと思っておりますけれども、全学的にどのように PDCA サイクルを回して教育改善を行っていくかというのが、鍵になっていくのではないかと思います。

概要であります。

滝澤：どうもありがとうございました。何かご質問等がございましたら。

皆本：JABEE の新基準で、従来はデザイン能力の中に含まれていたチームワーク力が、新たに独立して入ってきたのです。その背景は、JABEE が国際相互認証上、マルチディシプリナリーといいますか、異なった哲学、思想の下の人たちが集まって、集まったチームで作業できる能力を取り入れなければならなくなったということです。ABET とか国際相互認証のほうは、異なった哲学や思想の人たちと協力して作業できる能力を求めているということのようです。

JABEE の基準にチームワーク力が入った意図は、要するに、情報なら情報、電気電子なら電気電子という中でのグループ活動ではなくて、例えば、極端な話、医学部と理工学部からなるチームをつくって、何か新しいことをしていきませんか、今後難しいと思われ、現状では新基準に JABEE コースが対応するのは少し難しいかと個人的には考えております。

実は、知能情報システム学科も来年度受審なのですが、新基準で受審するとなりますと、そこがネックになってきます。今のところは、JABEE がそのような、指摘を受けているわけでありまして、各大学への通知は少し遅れているということもあり、来年の JABEE の審査には対応できるかと個人的には思うのですが、その後続く機械とか電気電子になってきますと、もしかしたら、チームワーク力といったときに、違う思想の人が集まったチーム編成、グループワークなどをしなさい、というのが入ってくる可能性がございますので、それについて何かコメントとか、せっかく理事がいらっしゃいますので、こういう学部横断的に何かやったほうがいいのではないかとご提案がありましたら、何か少しご意見をお聞かせいただきたいと思っております。

後藤：今の教育課程の枠組みでいいますと、インターフェース科目で実施せざるを得ないかと思っております。専門教育科目は、学科の学生に対する教育ということになっていきますので、いろいろな学部の学生と一緒にというわけにはいきません。現在の状況で、全学的な学生が協力してするということになりますと、インターフェース科目にそういった仕組みを持っていくのが一番かなとは思っております。具体的なアイデアがあるわけではございませんけれども。

皆本：そうですね、そこは少し難しいかなと思うのですが、全学の学生が集まって

何かプロジェクトをするような何か仕組みを作ろうとすると、インターフェース科目くらいですね。

滝澤：一番取り組みを用意するのは、それはインターフェースでしょうね。今、工学系のほうは、各学科がインターフェースのプログラムをどちらかという各学科向けに出されていますけれども、そこら辺もう少し工夫をされて、もう少し広い門戸を広げるようなことをされるとか、そういった方法があるのかもしれないです。

皆本：ぜひ、理工学部 JABEE 委員会に、それを広げる中心的な役割をしてもらえるとありがたいかなと思うのですけれども。

滝澤：そのほか、何かございますか。

宮脇：少しよろしいでしょうか。

滝澤：はい、どうぞ。

宮脇：JABEE の求められている課題の中で、1つはやっぱりそういう専門的な側面、能力、それから、もう一つは、教養的なそれも要求していると思います。

後藤：はい。学科中心でやっていると教養的な所がやはり抜けがちになってしまうのですけれども、JABEE の基準 1 を少し読ませていただきますと、地球的視点から多面的に物事を考える能力とその素養が、1 番目の基準となっているのです。

ですから、専門だけではいけないと。審査のときにも全学教育に関しては、やはり取り組みが不十分ではないかというような指摘を受けていますね。

宮脇：だから、全学的な対応が今後の課題ということと言われましたが、1つはそういう教員教育を、インターフェースなんかも含めていかに充実させるかと、そういう面と、それから、あと、先生方で PDCA サイクルを大学全体としてどう稼働させるかという、そういう 2つの側面からやはり考える必要があるのかなというふうに感じていますけれども。

滝澤：そのほかございますか。

中村：JABEE は基本的に学部教育を対象にしているのですか。今はかなり工学系は修士までが前提になっていますけれども。

皆本：はい。2つの基準があって、学士課程の基準と修士課程の基準があって、今お話ししているのは学士過程の基準です。

中村：だから、学士課程の教育のほうにはそういう教養教育が重視されるという観点が入ってくることになるのですか。

皆本：そうです。

中村：修士課程も含めるとまたずいぶん基準が変わってきますか。

皆本：修士は少し基準が違います。特に本学の場合なのですけれども、教員間ネットワークが弱いという感じなのです。教員間ネットワークというのは学部横断的で、教養と専門のネットワークをまずしっかりしないと多分 PDCA サイクルが回しにくいのです。JABEE の基準での教員間ネットワークというところは多分どこの学科も苦しんでいるところだと思います。そこがうまく構築できれば、うまく PDCA サイクルが学内に構築できるのでは



ないかと思えますけれども。

滝澤：1つ、JABEEを始められて、学生に対する効果というのは、教育効果としてはどんなふう実感されていますか。

村山：JABEEも、国際標準化時に対応という、そのメリットとしては留学生にあるかどうかという感じですよ。

後藤：そういうことです。

村山：国内のその日本人学生にとってのメリットというのは、国際標準に合わせることにってはどのくらいあるのかというのは少し微妙なところだと思っています。大きな再編を求められるというところがありますから、どのくらい費用対効果といいますか、あるいは、労力対効果が問われるのではないのでしょうか。

後藤：費用対効果では難しいのですけれども、これは一例なのですけれども、マレーシアから日本の工学系の大学に留学を希望する場合に、留学生を送り出す条件としてJABEEの認定を受けているところに限るということがあります。JABEEを取らないと留学生は受け入れられません。JABEE認定を受けていない大学には留学生を送らないということです。

村山：仮にそのインターディシプリナリティでしたか。

滝澤：マルチディシプリナリー。

村山：マルチディシプリナリーでしたか、そちらのほうにしませんと、観点が修正されなかった場合でも、向こうは勘弁してくれないのでしょうか。

後藤：それは多分、JABEE自体が国際的基準に準拠できるかということに依存すると思います。

皆本：国際認証を受けているところを卒業しないと、マレーシアに戻ったときに、マレーシアの技術士の試験も受けられませんから、認証を受けている機関ということで、東南アジアの留学生にはメリットがあるでしょう。国内の日本人学生に対してどうでしょうというところはありますが。

村山：それが、副専攻か何かをもう強制的に敷くような単位が必要になる可能性があるのです。

皆本：専攻ということですか。

村山：学際的なチームワークがもっと。

滝澤：いや、JABEEの中では、まだそこまで厳しくはなっていないですね。

後藤：現時点でJABEEが指摘を受けていますので、今後JABEEが対応しないといけないのですけれども、じゃあ、今すぐ審査基準を大幅に変更というのは少し難しいのではないかと思います。

でも、チームワーク力の文言は入れたというところで、この1~2年は少し経過措置で若干大目に見てもらえと言ったらあれですけれども。

村山：少し早めに対処してと。

後藤：早めに対応したほうがいいのは間違いないのですけれども、そのアイデアがなかなか

か難しいというところではないかと思います。

滝澤：質保証に関する取り組みとかそういったものは、JABEE から発生したところもあり、大学全体に、また活かせるような形で、今後とも取り組んでいただけたらと思います。

それでは、次に 2 号表彰のほうに移らせていただきます。医学部の教授であられる野出先生のほうから、取り組み等をご紹介いただければと思います、よろしくお願いします。

野出：今回、医学部の 5 年生に対する指導ということで受賞させていただいたと思うのですが、私は専門が心臓病ですが、5 年生の学生が循環器内科に同時に 6 人から 8 人病棟に回ってきます。

私自身は 2 回講義をしますが、1 回 2 時間かけて少人数で教えます。高度な検査とか高度な機械が多いのですが、心臓病の診察に関して、問診、聴診、視診が一番大事だということをお教えします。

どう患者さんから話を聞いて、病気を診断するか、聴診、視診、触診が病気に結びつくかということを中心に話します。

疫学から分子遺伝学まで網羅的に教え、聴診器で聞いて、心臓の形はどういう形をしているか、その後に、細胞はどう変化するか、マクロからミクロまで網羅的に教えます。臓器、細胞だけよりも、全体からミクロへという流れで考えることが重要であるということをお強調します。

今の医学の知識、教科書に載っている知識は 100 パーセント正解ではないということです。

心筋梗塞が起こった原因は、動脈硬化の原因は、高血圧が起こっている原因は何ですかと、「どうして」ということを質問します。

その中で、自分が今まで経験した症例と体験も加味して話します。単に病気の話だけではなくて、失敗だとか、看護師さんとコミュニケーションをとってきたか、どう周りの上司とやってきたかということも含めて、対話形式で講義をするようにしています。

基本的なところは、教科書がありますので、そこは自分で読むということにして、プラサルファを学生に教えました。

滝澤：どうもありがとうございました。

何かご質問等がございましたら、どうぞ。

諸泉：1 ついいですか。今、学生に問診、聴診、視診、触診の重要性を教えるというお話がありましたが、一番難しそうなのは問診なのかなと思いました。私は素人なので、まったくわからないのですけれども、問診をどのように行うかというのは、どういうふうにして教えられるのですか。

野出：問診のこつはコミュニケーション能力なので、話を引き出すための態度や言葉の使い方の指導ということです。

医者がしゃべるのではなくて、できるだけ患者さんから聞き出す方法を話すようにしています。

諸泉：聞く力というのが大切なのですか。

野出：大事ですね。自分が説明するより、いかに患者さんから話を聞くか、雰囲気づくりですね。

諸泉：なるほど。

野出：「どうやったら、患者さんから話を引き出せると思う？」と聞きます。

諸泉：なるほど、分かりました。

滝澤：そのほか、何かございませんでしょうか。

先生のやられているこの臨床実習というのは、何回生ぐらいになったときにやるものなのですか。

野出：臨床実習は基本的に5年生です。

滝澤：5年生までに基礎知識はしっかりと講義等で身に付けた上で、実際の臨床のほうで。

野出：そうです。

滝澤：そこで実際の知識を、生かせる知識に変えていきますと。

野出：今の最新のデータや、これから、このデータがどうなっていくかということまで含めて話すと、学生は興味を持って聞くようになります。

村山：インターフェースは大切なあれですけれども、教養教育もインターフェース科目を1年生のころに、ですから取らせて、それを5年生にもう一遍磨き上げる、そういうことはお考えになるのですか。

野出：まだ、私自身は担当していませんから、1年生、2年生に対してどういうふうに学生を教育したらいいか分かりませんが、先生がおっしゃるように、1年生に対しても指導、教育があれば、有用かもしれないですね。

滝澤：では、続きまして、工学系研究科の高度技術研修ものづくり技術者育成講座機械基礎講座というところで、代表の木上先生、よろしく願いいたします。

木上：はい。今回ご表彰を頂いたものにつきましては、佐賀大学の学生に対する教育ではなく、外部の方に対する講座に関することでご表彰頂きました。

大学は学生に対する教育と研究がもちろん本分なのですが、産業界に対する貢献とか、地域の皆様についての貢献ということも、近年特に問われるようになってきています。工学系研究科、理工学部の教員としても、なるべく地域の産業界の皆様と関わろうということで、訪問等をここ数年やってきているところです。

そういう中で大学に対する要望というのをお聞きしますと、現場で困っていることについてもありますが、人材の育成ですね、大学は教育をしますので、工業界は数学、物理等、客観的な知識が必要なものもたくさんありますので、何かしらそういったものを開講してもらえないだろうかという話がありまして、平成20年度から産学連携、地域連携ということで、TLOが主になっていただきまして講座を開設しようということになりました。

今回表彰を頂いているのは機械基礎コースグループで、メンバーは今現在4人の講師の

グループなのですけれども、実はほかにもたくさんグループがありまして、コンピューター援用工学に関する講座、ロボット制御に関する講座、電気電子工学に関する講座、あとは化学に関する講座とたくさんありまして、その中の代表ということで今回ご表彰いただいたという立場なのですけれども、機械基礎コースについては数学、力学、材料力学、機械加工という4科目について、一講座90分の授業を10コマずつということで開講しております。

対象は、皆様、働いているエンジニアの方ですので、土曜日に5月から10月ぐらい、半年かけて月2回ぐらいのペースで開講をいたしております。これまでに年に10名程度の方が受講されまして、対象の方は大学を卒業された方と、高校卒業で就職された方と半々ぐらいになると思いますけれども、高校の方は一から大学のことを勉強したいと、大学卒の方は、昔習ったのだけれども少し忘れて、もう一回勉強したいというような方が来られています。

滝澤：どうもありがとうございます。何か、そういう学生以外の社会人を対象にした教育ということでの表彰ということですが、いかがですか、何かご質問等はございますか。

お話を聞いていますと、社会人の中でもいろいろなレベルの人がいて、そこら辺が苦労をしそうだと思うのですけれども、実際講座をやられてどうですか。

木上：そうですね、かなり幅広くて、簡単なところをまずやって、プラスの部分は少し後でというか、演習等をしていただいて、物足りない方はその演習はすぐ終わりますので、そういう方に追加で少し難しいことをやるということなんです。

滝澤：じゃあ、結構個別の対応というような形。

木上：はい、個別対応はかなりあります。

諸泉：講座を、90分10コマで半年やって、やった後に何か証明書とか、そういうのは出すのですか。

木上：はい。佐賀大学TLOのほうから、受講の修了証というようなものを発行しております。修了式に皆さんに集まっていたいただいて、修了証書を手渡すということになっております。

五十嵐：これは佐賀県が支援をしているプログラムで、受講生の受講料をたしか県が補助をしているものですね。

木上：そうです、はい。

五十嵐：自己負担はございましたか。

木上：はい。この基礎講座の分で、たしか3~4万ぐらい。

五十嵐：そのくらいですね、かなり安い金額だと思うのですけれども、いろいろな社会人向けのこの専門性の高い教育サービスをするときに、やはりそれなりの自己負担を伴って受講する場合と、ゼロに近い比較的低い金額で受講する場合には、モチベーションだとか熱意だとか、それが違うだろうというのが一般的な評価なのです。

私は農業版MOTをやっていますけれども、これは履修証明を出す関係もあって、授業料

を年間 15 万円徴収しているのですけれども、受講生のいわば質の確保だとか、あるいは教育効果を考えた場合に、県の補助金ではなくて大学独自のプログラムとして履修証明書を出すような、そういう仕組みに移行するという計画はございませんか。

木上：そうですね、今のところはないのですけれども、どちらかという、どんな人でも受けに来てくださいと、こちらが呼びかけているぐらいです。最初のやり出した当初はまあまあ多かったのですけれども、近年少し減りまして。

五十嵐：そうですね。

木上：そうです、何度もは受けに来られませんので、今のところは、そのような計画はありません。

諸泉：今の話は、お金を払ったほうが、モチベーションが高いということですか。

五十嵐：はい、やはりお金を払ったほうが勉強をしようという意欲は高いですね、一般論ですけれども。

諸泉：ええ。あまり高過ぎると今度は少し。

五十嵐：いやいや。

諸泉：そういうことなのでしょうね。

中村：それは出すほうの企業は、例えば、今は何であれ補助がありますから、それで、例えば普通社会人だとどうしてもまた、土曜日、仕事が急に入ってとかいって、例えば経済の夜間とかやっても、仕事があるから今日は来れないとあって、入ってくるときに約束をしているのですけれども、どうしても休みがちですとか、そういう協力は、出しているほうの企業と何か約束はあるのですか。来てください、あまり休まないで来られるように配慮してくださいとか、そういうこと。

木上：受講料に関しては、最終的に個人負担になっているが、その会社が負担しているのかまでは、われわれには見えないというようになっているのです。

中村：いや、休みにです。その仕事と、その日あるのとあったときに。

木上：休みについては、おっしゃるとおり、今日は土曜日仕事が入っているので来られませんというのは、よくあるケースです。

中村：そうですか。

木上：たいていの場合、1つの職場から複数の方が来ておられていまして、その方にノートなりを補充していただくような形で進めています。

滝澤：これはもう何年目ぐらいになったのでしょうか。

木上：平成 20 年度からですから、もう 6 年目です。

滝澤：もう 6 年ぐらいやっていたのですね。最初はどういう、今、定常状態といいますか。

木上：そうですね、最初は基礎講座も 16 名ぐらいだったのです。昨年は 5~6 名ぐらいまで下がったのです。ことしは少し持ち直して 10 名か 12 名。

滝澤：すると、やはり一定の要求はずっとあるということですね、地域のほうからもある程度のそういった講座を受けたいと。

木上：そうですね。

滝澤：まだ、何かございますか、よろしいでしょうか。

それでは、続きまして農学部の准教授であります永尾先生のほうから、ご紹介をよろしくお願いいたします。

永尾：はい。ご表彰を頂いた内容の一つは、指導学生が学会で「発表賞」を頂いたということです。指導教員として学生さんに、学会発表をする機会を設けている理由としては、賞を頂くためというわけではなくて、学生さんが他の人に対して自分のやっていることを発表する機会を設けることで、非常に成長を促す機会になっていると行って行っています。

それは、その学生さん自体が相手に伝わりやすい発表をしたいという、いろいろ工夫する機会にもなっていますし、自分のやっている内容や研究結果の意義について考える機会にもなっていて、その都度、有意義なものになっていると感じています。

これも、単回で行うわけではなくて、在学中になるべく複数回、設けるように私も努力していきまして、それが学生さんにとっては、それなりのプレッシャーではあるでしょうが、終わった後の達成感というか、それは賞を頂いた学生だけでなく、昨年度の大学院生 6 人全員において、発表で頂いた意見であるとか、評価とかが、その後の研究のモチベーションになっているような感触を得ています。なるべく学生さんにそういう外で発表する機会というのを設けるようにして、それが成長につながればいいなと行っていろいろ努力しているつもりです。

この受賞学生に関しましては、本人の工夫に加えて、研究の新規性なども相まって賞を頂けて良かったと思います。

もう一つのご表彰頂いた教育活動としましては、途上国で食糧危機や飢餓のような栄養不足の問題があり、片や先進国では過食になって栄養過多で不健康になっているというような問題があり、世界中に 2 極の栄養問題が存在することに対して、農学部というのは何ができるのか、私が所属する生命機能科学科や食品栄養化学という分野が何をしているのかというようなことを、学会や大学が開催する市民公開講座、ジョイントセミナーやオープンキャンパスといった機会があるごとに高校生や市民の皆さんに対して、意義や面白さも併せてお話ししてきた、という内容でした。

滝澤：どうもありがとうございました。

では、何かご質問等がございましたら。

諸泉：よろしいですか。ここに例が挙げてあります「日本栄養・食糧学会九州・沖縄支部」というような学会は、院生の報告をかなり多く受け入れるような性質のものなのですか。

永尾：そうですね。九州各県の大学から発表がありまして、発表賞に関しては 40 歳未満であれば学生に限らずエントリーでき、各県から 1 人ずつの審査員による投票方式で講演要旨による 1 次審査と口頭発表による 2 次審査をする形で、支部の学会活動の活性化という意味で積極的にやっているものです。そこでご評価を頂きましたので、それなりに喜ばしいことだと思います。

諸泉：先ほど、持っていらっしゃる院生が5~6名とおっしゃいましたか。

永尾：そうです、昨年度は6人いました。

諸泉：それぞれの院生をこういった学会で、先ほどの書類審査等でクリアさせていくのは大変なことだと思うのですけれども、テーマなんかは先生のほうで、学生に指導とか。

永尾：そうですね。昨年は少し人数が多過ぎたところもあり、学会に連れていくだけでもお金がかかりましたが（笑）。でも、均等にチャンスを与えてあげないと、学生さんのモチベーション的な問題もありますので、平等にするためにテーマの設定も含めて大変苦労したところがあります。

諸泉：基本的に1人ずつ、グループとかではなくテーマを研究すりのですか。

永尾：修論発表もしなければいけないので、院生は1人1テーマを学部生と一緒にやっている感じです。

滝澤：これ、学会発表をする学生というのは、大体M2になってからというものなのですか。

永尾：賞を頂いた子はM2でしたけれども、卒業研究の発表会や修士に入ってM1からも学会発表をさせて、積み上げてブラッシュアップした成果だと思います。

諸泉：さすがに、4年生ぐらいではないですか。

永尾：はい、4年生に学会発表をさせたことはありません。

瀬口：こういった取り組みは、そちらの研究室に先代の柳田先生がいらしたときから活発にされていたような気がするのですけれども、学生さんに、モチベーションを高めるための、今でも何か学会活動、学会発表を通して、研究に対するモチベーションとか、社会の目標に対する意欲というか何か、活発にされたように私は印象を受けてきているのですけれども、その辺りはいかがですか。

永尾：そうですね、例えば、学生との関係が、授業で接するときは単位を与えるか与えないかという評価者として接するのですが、研究室に配属された学生さんに対しては、各自なりに納得のいく卒業研究なり、修士論文研究なり、就職活動なりができるように、評価ではなく支援するというつもりで接していて、それが学生さんのモチベーションの維持や啓発の手助けになっていけば嬉しいです。

滝澤：よろしいでしょうか。どうもありがとうございました。

それでは、最後になりますが、総合分析実験センター准教授の兒玉先生のほうから、取り組みの概要等をご紹介いただければと思います。

兒玉：はい。佐賀環境フォーラム、2001年からもう今13年続いているプログラムの事業部長をやらせていただいておりますが、これは佐賀市と佐賀大学が協働で行っているプログラムで、前期に外部講師6名で学内講師、いろいろな学科の先生に6名来ていただいて、オムニパス形式で行っている講義と、ごみ関係と自然関係に関する体験学習、あと工場だとか企業に見学会に行く内容が前期。その内容を受け、知識と体験を通じて得られたものを行動に移していただくということで、（2年前ぐらいから通年になりましたが、）ワーク

ショップという形で、環境活動を実際にやっていただくということになります。

これは学生に対しては教養教育ですが、これは公開授業を兼ねていまして、社会人の方に参加していただいて、生涯教育を併せて行うということで、学生さんと、社会の方ですね、市民の方が一緒に授業を受けていただいて体験学習、ワークショップをしていただくということになっています。

あと、運営する人間に関しても、教員、職員だけではなくて、市民のスタッフ、学生スタッフを含めて運用するというので、1つの目標に向かっていろいろな立場の方が一緒に運営と学習をするということになっています。

双方向の学習を目指すという意味で、講義は、質疑応答は受けて投げ返すだけではなくて、その質疑応答を、感想を共有して、それに対する感想なんかもやりとりして、何回かやりとりをしながら意見を共有していこうという形にしております。

今回評価いただいたのはワークショップのほうで、そのワークショップもグループは6グループほどありますけれども、その中の1つで、学内の放置自転車を再生処理して販売して、循環型社会を推進していこうという活動をやるグループ「チャリさがさいせい」というのを組織しまして、それを全国的な環境活動のコンテスト、これに3年前から応募してきました、1年目も準グランプリを頂いたのですが、3年連続でそのグランプリを頂きまして、その意義を発信するという結果が出たということで、そういう評価を頂いたと思っております。

以上です。

滝澤：ありがとうございました。

では、何かご質問等がございましたら。

皆本：すみません、社会人の人たちが来るというのは、ほとんどボランティア的に来られるのですか。受講するときに、何か制限とかいうのはありますか？

兒玉：制限は特にありません。前期講義のときにはお金を払って来ていただいているのですけれども、ワークショップのときには、院生にもメンバーとして活動していただいています。

皆本：事前には一応、「来ますよ」という連絡は行ってからでしょうか。

兒玉：ええ、そうです。一応、集会、顔合わせがありますので、そこでメンバーを、顔合わせをして、リーダーを選んでいるということを毎年しています。

ただ、もう通年で毎年やっていますので、古い方はもうだいぶ何年も参加しておられます。

皆本：大体メンバーは固定されてきたという感じでしょうか、それとも、毎年新たな人がどんどん入ってくるという感じでしょうか。

兒玉：学生に関してはぐるぐる回っているような感じですがけれども、社会人の方は割と固定されている感じです。

皆本：今は固定されている感じになっている、はい、ありがとうございます。



諸泉：フォーラムは、9時ぐらいまで、やっていらっしやって、先生ご自身は教養教育運営機構の部会の代表も務めておられて、いつも大変だなと思って見ているのですけれども、授業はかなり多くの受講生を集めてやっていらっしやいますよね。

兒玉：ええ。

諸泉：フォーラムは、先ほどのお話ですと、社会人が多いのですか。学生と少し温度差が出てきそうな感じもするのですけれども、そこら辺はどうなのですか。

兒玉：悩みの1つでもあるのですが、最近1つ、学生の個性が少なくなっているというのがありまして、1つの原因は、会で認められていない学科とか何かあるとかいう話もありまして、学科の偏りが少しあるというものがあります。

それと、大体1年生が受講生は多いものですから、本当だったら、もう少し知識を入れたところで意見を市民の方が対等に言えるような立場でやりたいのですけれども、それがなかなか意見を言うのに慣れていなくて、市民の方の意見が多くなりがちだというのはあります。

諸泉：これは、今後インターフェースの中に組み込んでいくのですよね。

兒玉：一応考えていますね。その中で、一応、なるべく学生のほうの方にも意見を言っていたきたいですので、2年続けて同じように参加していただくのですが、1年目は体験ということで、どういうものかというのを体験してもらって、2年目になるときはもう少し勉強して、そういう課題を課していったりやりとりしながら意見が言えるようになればと思っていますところでは。

五十嵐：ご苦労も大変多いと思うのですが、インターフェースのほうに移行していきますので、今、佐賀市とのいわばジョイントで行っているわけですが、佐賀市のほうから経済的な支援だとかいろいろな支援がありますので、その関係は当然大事にしていく必要があるかと思いますが、もう少し佐賀市を超えて佐賀県という範囲の中で、この事業を再編していくようなご計画はございませんか。

兒玉：周辺の市の方からも参加者は来られるのですよ。周囲の自治体と、（この前、鳥栖市とかはお話しさせていただいたりもしたのですけれども、）一緒にやろうというところもあるのですが、どうしても佐賀市の参加者が多いですので、資金負担までお願いするということではなくて、呼びかけをしていただくとかに今はとどまっているのが現状ですね。

五十嵐：佐賀市とも協議しながら、もう少し佐賀市の枠を超えてしますと、いろいろな社会人が来られる可能性もありますので、ぜひインターフェースのほうでその展開ができるようにご協力いたしますので。

兒玉：はい、分かりました。

滝澤：大体この手のものも、何年かしたら、だんだんしぼんでいくというのが普通だと思うのですけれども、ずうっと続いているのは、どこら辺に。

兒玉：どこら辺に、初代の先生の強い圧力（思い）が（笑）、強くて（笑）。

五十嵐：インターフェースの事業は、行政と連携しているとやめられないのです。

兒玉：それもあります、はい、ですね。

滝澤：それと市民の方とも連携していますので、少しそのほうの継続性も。

兒玉：そうです、市民の方の意向もありますので、なかなかやめると言い出せないところもあります。

滝澤：どうもありがとうございました。

それでは、長時間にわたりまして表彰を受けられた皆様方から貴重なご紹介を頂きましてありがとうございました。

では、今後、先生方のますますのご活躍をお祈りいたしております。では、これをもちまして座談会を終了させていただきます。

本日はどうも、ご参加ありがとうございました。